

環境保全のボランティア体験講座 2026 第4回講座レポート

第4回目の講座は8月2日(日)に大阪府貝塚市と岸和田市にまたがる和泉葛城山ブナ林での開催です。この日の受講生は13名。環境事業協会本社のビルの1階で集合してA班とC班の2つに班分けをした後、バスに乗り込みました。



前回の信太山に続き今回の講座でも、昨年度の受講生がスタッフとして参加したいとのことで立候補されてきたので、受付や現地での役割を振って、集合から解散まで協力してもらいました。

さて、約2時間足らずで予定より少し早めに和泉葛城山山頂の駐車場に到着すると、今回の講座でお世話になる和泉葛城山ブナ愛樹クラブの皆さんが、ちょうど出迎えてくださいました。団体の紹介に入る前に、早速、建物横に人為的に植えられたブナを教材に、自然と観察会が始まりました。右の写真は、受講生たちも集まり、お話を聞いている時の様子です。



時間が来たので仕切り直しです！和泉葛城山ブナ愛樹クラブご紹介ののち、代表の土井雄一さんに、まずは和泉葛城山ブナ林の概略やブナについて、配布資料を使用しながらご紹介いただきました。その後、受講生はA班とC班に分かれてブナ林の視察を行いました。



A 班

下の写真は駐車場すぐ横にある和泉葛城山の山頂に向かう様子です。A 班の引率をご担当いただいたのは、土井代表です。



山頂では写真左に3本ほど並んでいる、ミズメという木の説明がありました。サクラと似ていることから、間違えて植えたのではないかという話があります。



この木は枝を折って匂いを嗅ぐと、サロンプスのような独特の香り(成分:サロメチール)がするというので、順番に葉を回して臭いを嗅いでみました。



C 班

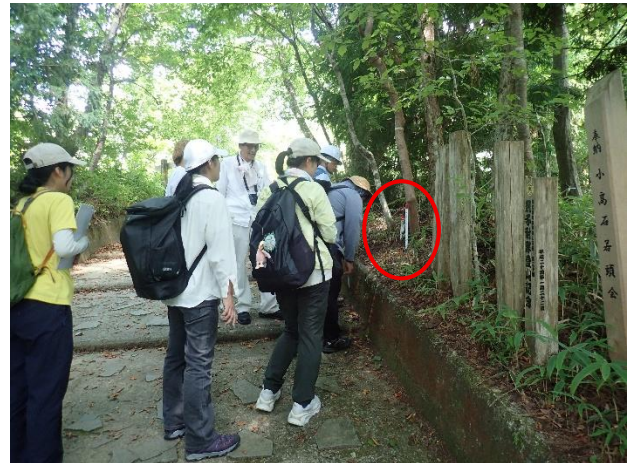
こちらは C 班をご担当いただく高原さん(写真中央)です。コースは基本的には A 班と同じで、少しの時間差で同様のポイントを回ります。



付近に生えていたツチアケビという日本固有種のラン科植物の説明がありました。人目を惹く姿をしていますが化学薬品のような強烈な異臭と苦味もあり、食用にはなりません。



山頂に向かう途中にあるブナの稚樹について、「周囲の草本類と間違っ刈り取られることもある」という、説明を聞いている様子です。



A 班

この写真は実は5年前の講座で同じ木を見たときの様子です。開催時期が違うので葉色が違うものの、見比べると樹高が高くなっているのが分かりますね。



その横にある、「和泉葛城山ブナ林が天然記念物指定されて 100 周年記念の時にブナ愛樹クラブが植栽したブナ(赤丸印)」を説明している様子です。



C 班

和泉葛城山の山頂には大阪府側に高麗(たかおがみ)神社(葛城神社)と和歌山県側の龍王神社が隣接して立地しています。この土地は五箇荘といって、5つの地区が土地の所有者となっており、協働で地域を守ってきました。設置看板を使ったりしながらその歴史などのお話があり、受講生は聞き入っていました。

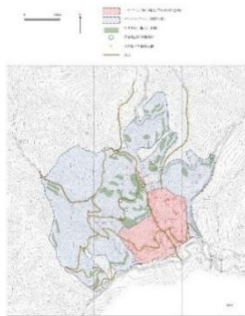


ふと石柱についていたトホシカメムシ(学名: *Lelia decempunctata*)を見つけました。角度的に見にくいですが、背中に10個の小さな黒い点があります。市街地ではめったに見つからない種類です。



A 班

塔原道の観察デッキを目指します。神社の長い階段の途中にも解説ポイントはたくさんあります！



周辺一帯はコアゾーン（左の地図の赤色の部分）であるため、樹林内に立ち入りできないように木柵が張り巡らされています。受講生たちは講師のあとについて林道を歩き進めました。



C 班

昨年夏、ひときわ高く伸びていたことから落雷したものと推測される真っ二つに裂けたスギが、このたび伐倒処理されていました。



右の写真は、昨年の講座時に撮影したそのスギの様子です。ここは天然記念物保護区域内（コアゾーン）であるため、このような樹木の伐採についても、地主や文化庁、市などとの調整を含め、かなり詳細な手続きを経たうえで実施されます。



全てのブナの木の本元には、番号が振られた赤/白の標識が刺さっていますが、和泉葛城山にはブナとよく似たイヌブナが混在して自生しており、下の写真は違いを説明しているところです。



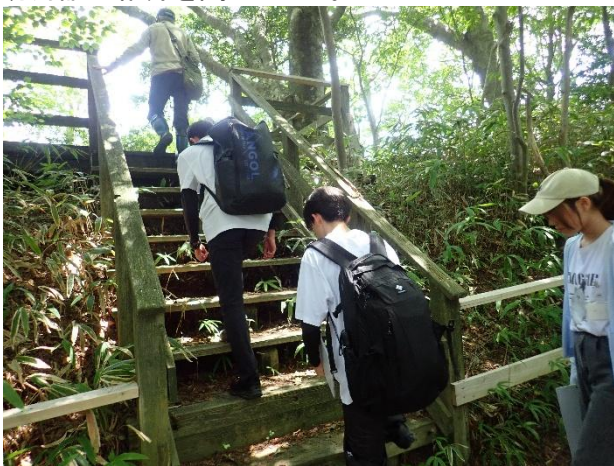
トピック

2017年3月末に伐採されたブナの枯死木(赤丸印)を解説されている様子です。当時、倒木の危険回避という理由があったが、必要な文化財保護法上の手続きを経ずに国指定天然記念物「和泉葛城山ブナ林」の樹齢約300年とされる大木1本が根元から伐採され、問題になりました。その後、伐採されたブナをただ廃棄するのではなく、後に「この木を歴史の語り部として残そう」という話になり、皮肉にも「貴重な研究資料」になりました。2018年12月、幹から4枚の円板標本が切り出され、①きしわだ自然資料館②貝塚市立自然遊学館③大阪市立自然史博物館④おおさか生物多様性センターの4か所に收藏されました。

A 班



塔原道の観察デッキです。ここでは受講生はブナの大木の下に落下している種子を探したり、気象観測器の紹介を聞きました。



C 班



植栽ブナの案内看板です。コアゾーンの周囲にある緩衝地帯「バッファゾーン」には、これまで3000本あまりのブナの植栽がされてきたという話を受講生は聞くことができました。

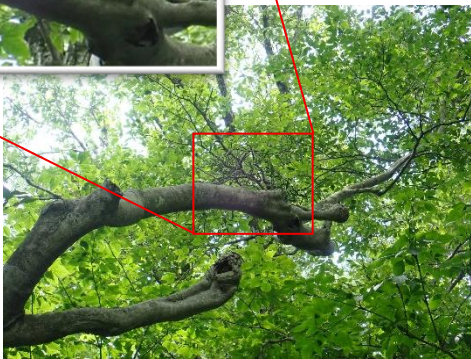


A 班

ヤドリギの解説がありました。ヤドリギは、他の樹木に寄生しながら成長する半寄生性の常緑植物です。地面に根を張らず、他の樹木の枝に根を食い込ませて成長します。



繁殖は、鳥が果実を食べ、その糞が樹皮に付着することで行われます。



右上にある観察デッキでの解説等が終わり、C 班と入れ替わりしました。写真はその時の様子です。奥に C 班が待機しています。



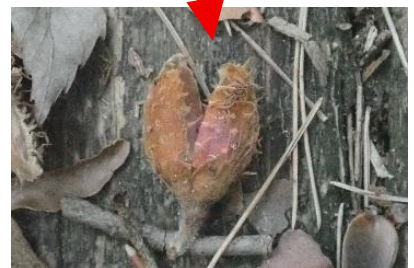
雨水が樹木の幹を伝って地面に流れ落ちる現象「樹幹流」の写真がよく撮れるブナを紹介している様子です。樹幹流は、森林の水循環や養分供給に重要な役割を果たします。

C 班

観察デッキでブナの大木の下に落下している種子を探している様子です。殻斗(かくと)の中にある堅果(けんか)は、季節柄、中身が無いものばかりでした。



下の写真は観察デッキから見下ろした時に視界に広がるブナ林の様子です。傾斜が急なのが分かりますね。



奥に見えるブナの大木(赤丸印)が白く枯れています。原因ははっきり説明されておらず、残念でなりません。



オオセンチコガネ(学名: *Phelotrupes auratus*)

付近で糞虫を見つけました。哺乳類の糞を餌とするため、この地域に哺乳類が生息していることが分かります。地域によって赤や緑、青、銅色など、異なる色彩の傾向が見られます。



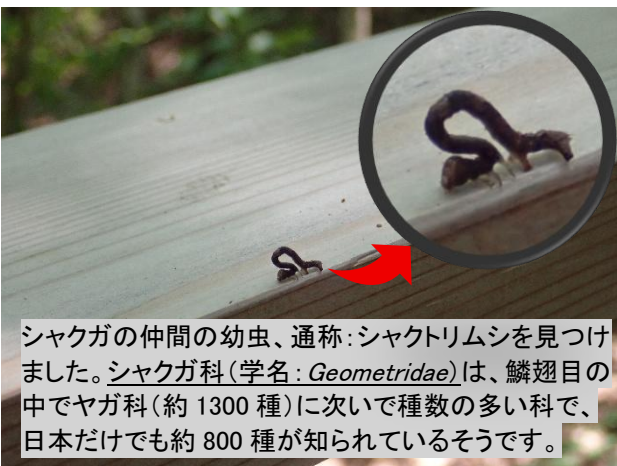
そして今年も、講座時に「ブナ街道」と呼ばれる、ブナの巨木が連続して生えている場所で、ブナに生えるオオミノコフキタケかコフキサルノコシカケと思われるキノコを、同じようなアングルから撮影しました。同角度で撮影3年目となる今年、残念ながらこのブナは枯れてしまいました。黄色の丸印内を見ると、昨年まであった枝が今年は無くなっており、枯死したことが分かります。ブナの巨木が次々と枯れていく一方で、植栽されたものの以外の稚樹が育っていないことが懸念されます。

A 班

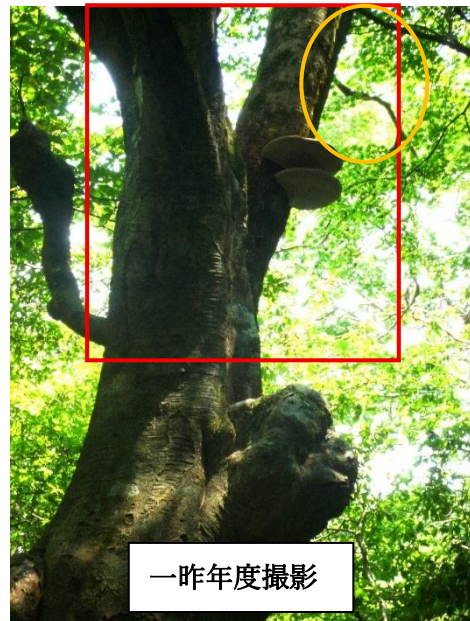
こちらは牛滝道の観察デッキです。矢印の先にはブナの大木がそびえています。そのブナの種子を探している様子です。



視察も終盤です！観察会は続きます。手すりにシャクトリムシを見つけました。



シャクガの仲間の幼虫、通称：シャクトリムシを見つけました。シャクガ科(学名: *Geometridae*)は、鱗翅目の中でヤガ科(約 1300 種)に次いで種数の多い科で、日本だけでも約 800 種が知られているそうです。



さて、先に休憩所に到着していた C 班に、A 班が合流して休憩となりました。標高 800m を超える位置から和歌山側の景色が一望できますので、その光景を収めようと撮影している受講生の姿がありました。



午後からのメインとなるのは、木の間伐体験です。

その会場となる、和泉葛城山ブナ愛樹クラブが使用している作業小屋へ向かう途中、気象観測器の傍に立ち寄れる場所で、機器について説明しました。弊社職員の岡本は、この気象観測器を管理している大阪みどりのトラスト協会の元職員で、当時はこのブナ林の担当者でもありました。その経験を活かし、なぜこの場所に気象観測器が設置されているのか、どのようなデータを計測しているのかなどについて、受講生に解説しました。ちなみに、ここでは風速・風向・雨量・気温・日照時間を計測しています。これらのデータは、現在の状況を把握するだけでなく、長期間にわたって蓄積することで、気象の変化や傾向を読み取ることを目的としています。こうした長期的な視点での観測が、ブナ林の環境を知るうえでも重要となります。



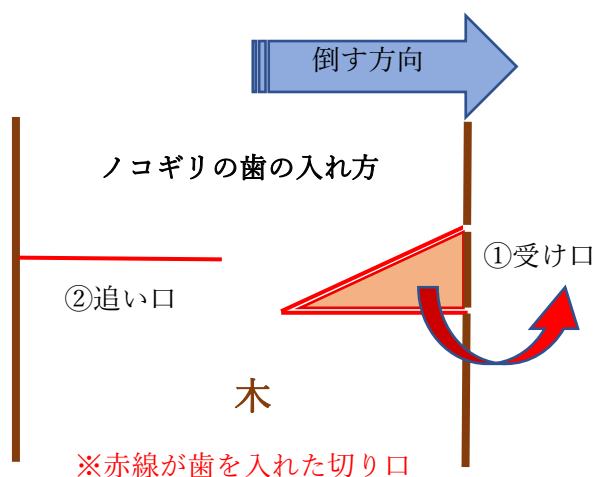
和泉葛城山ブナ愛樹クラブののぼり旗を見つけ、少し坂を上がると作業小屋が見えてきます。その途中にあるスズメバチトラップに受講生は興味津々でした。



作業小屋のある敷地に辿り着き、ブナ愛樹クラブの方々全員にお出迎えいただきました。ここからは受講生はノコギリや軍手の装備品を身に付け、説明を聞いてから二手に分かれての活動となります。まずはヘルメットをかぶって、作業の準備です。ヘルメットをかぶる前にタオルや帽子などで髪をカバーしておくと、髪が引っかからず痛みありません。一部の人は用意された不織布カバーをかぶって、ハイ・チーズ！素敵な笑顔が撮れました☆ヘルメットについても装着の仕方を学びました。



そして木の模型を使い、これから行う木の伐倒について基本的な作業方法を説明されました。教えてくださったのは中室さんです。右の図はその内容を図式化したものです。中室さんにはC班をご担当いただけることになりました。



真剣に話を聞く受講生たちの姿です。



こちらはA班をご担当いただけるブナ愛樹クラブの吉崎さんです。



ふと、ネザサにとまるガを見つけました。キンモンガ(学名: *Callimorpha japonica*)は、日本国内で広く見られるガの一種で、鮮やかなオレンジ色と黒い斑紋が特徴的な美しい種類です。その外観から「昼間飛ぶ蝶のような蛾」として注目されることもあるようです。



早速、二手に分かれて作業道を通り、それぞれの現場に向かいます！

A 班



作業道を抜けると、A 班が伐倒するヒノキがありました。講座の進行がしやすいように、ブナ愛樹クラブの皆さんにより事前に切り倒す木にロープをかけておいていただけたようで、このロープは倒したい方向に木を引っ張り安全に倒す為のものです。事前準備ありがとうございます！



吉崎さんの説明が始まりました。初心者である受講生に丁寧に教えて下さりました。



C 班



C 班の作業場は、A 班と違ってご覧のようにかなりの斜面です。事前に切り倒す木にロープをかけていただけていた上に、初心者である受講生が作業しやすいよう、足場の悪い場所に階段を作っていただけでいい。細かい配慮と事前準備ありがとうございます！



そしてC 班のご担当中室さんによるご指導の下、こちらの班も作業を進めていました。



早速、木にノコギリを当てて受け口から切り込みを入れていきます。ノコギリは引いたときに切れることを教わり、重力の方向に対し、平行にノコギリを入れていくのがポイントと学びました。これがなかなか人によっては難しいようでしたが、上手な人ははじめてでも手際よく切れていました。

A 班



一巡して次は受け口の斜め切りですが、その作業はブナ愛樹クラブの方々にお任せして、続いて追い口を作っていました。

下の写真は反対の方からノコギリの歯を入れていき、追い口を作る時の様子です。手前に見えている切り口は受け口となります。



C 班



受け口の作成が終わり、次は追い口を作っていきます。(写真下)



途中でノコギリの動きが止まりました。切り進めると、風や自重によって鋸刃が木の隙間にプレスされて動かなくなる時があります。そんな時は、下の写真のようにクサビを打ち込んでそれ以上締まらないように固定すると、隙間ができてノコギリの歯が入っていきやすくなります。



A 班

また受講生がノコギリを使用して作業を進めます。一巡し、ある程度追い口が切れたところで、滑車を利用したロープで木を引いてみることに。・・・しかし皆で協力して綱を引きますが、なかなか木は動きません。更に吉崎さんがノコギリの歯を入れ、何回も引きますが時間だけが過ぎていきます。



簡単に動かない原因は、作った受け口の向きによるベクトルの向きと、引くロープの向きによるベクトルの向きが異なるためと推察されます。同じ向きでないと抵抗が大きくなりますので、こういったところも丁寧に作業することがコツです。



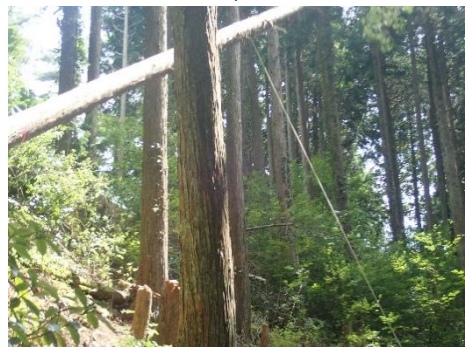
やっとの思いで木が動いて倒れかけましたが、今度はかかり木になってしまいました。隣の松の木の枝に引っかかり、動きません。



C 班

追い口が切れたところで、皆で力を合わせてロープを引きます！

結果、本来の想定していた向きから少し反れたものの、最後の写真はうまく倒れて万歳の様子です！皆さん笑顔ですね！達成感があったと思います。



A 班

そこでチェーンソーの出番です！先に作業を終えた C 班の中室さんが駆けつけてくださいました。地上から 120 cm 程度のところで再度切断し、落とし込むことで松の木にかかっている部分を回避しようという作戦です☆



しかしこれもなかなかうまくいかず、チェーンソーが木に食い込む事態に…



より効率的に作用する場所に新規にロープをかけて引き直そうとしましたが、ここで残念ながらタイムオーバーです。次の作業に移るため、A 班は伐倒を見届けることなくその場を後にしました。



C 班

伐倒したヒノキの切り口です。綺麗に切断できたことが見て取れます。断面からはヒノキのいい匂いがしています。有効成分ヒノキチールには抗菌作用や防ダニ効果があり、香りもいいことからヒノキは様々な製品に使われています。



下の写真は倒したヒノキの枝払いをしている様子です。この作業では不要な枝葉を土に面で当たるような大きさにそれぞれ切断し廃棄することで、早く微生物に分解されやすくする効果があります。



そしてすぐ上でかかり木となっている A 班を気にしながらも、作業は続けました。



A 班

続いては、丸太の玉切り体験です。馬と呼ばれる台座に予めセットしていただいた丸太を、切断していきます。丸太が動かないよう、協力して馬ごと押さえながら、それぞれ好みの幅に加工しました。



作業台の周りに集まった受講生。輪切りのヒノキの樹皮に1箇所切り込みを入れて、竹べらを差し込んで皮を剥いていきます。そのことで、虫害の防止や品質の安定が見込めます。



C 班

A 班より早く木の伐倒が終わった C 班は、先に玉切り体験をはじめていました。写真は高原さんにご指導いただいている受講生の様子です。



丸太の両端を切断するので、真ん中を押さえている様子です。



使い終わった道具は、木くずが残らないようにブラシで洗淨します。水分が錆を発生させ、すぐにノコギリを傷めてしまうので、水分をふき取った後、錆止めのスプレーを噴霧します。



ここで皆さんにはプレゼントの配布です。この日の為にヒノキの工芸品のプレゼントを吉崎さんによってご準備頂けました。昨年度の講座で受講生により伐倒されたヒノキを使った、「一輪挿し」になります。



左の写真は、思わぬ記念品にヤッター！の瞬間♪
一輪挿しは、受講生にはあえて完成品を渡さず、仕上げを自身でもらうために未完成品が封入されています。
セットの中には説明書がありました(右)。完成させるためのヒントが書かれています。説明内容も、図付きでとても丁寧に作り込んでいただいていますので本当に感謝です。



下の写真は、その説明を吉崎さん(左下写真右端)にお聞きしている様子です。



その後、受講生にアンケートを書いてもらって恒例の「ふり返り」です。少し時間が押していましたが、ブナ愛樹クラブの皆さんにも輪の中に入れてもらい、受講生の感想を共有しました。





また、左の写真のように昨年度の受講生(右端)にも現受講生に向けて
 労いの言葉をかけていただきました。
 そして右下の写真は、「和泉葛城山ブナ愛樹クラブの会員になったら、
 ラミネートされたカレンダーが貰えるよ！」という会員募集の案内をして
 いる様子になります。

右中央の写真は、天然木で
 作られたカメラ台に2台のカメラ
 をセットしている様子です。



最後は参加者全員での集合写真を撮りました。
 いい思い出になりました☆



そしてお世話になったブナ愛樹クラブの皆さんにお礼を言ってバスに乗り込み、和泉葛城山をあとにしました。
 そしてバスに乗り込み約2時間後に降車場に到着した一行は、無事解散しました(写真右下)。



■受講生の声 ～木を伐る体験から学んだ森林保全～

受講生アンケートの自由記述から、印象的な感想をいくつかご紹介します。今回、特に多く寄せられたのは、実際に木を伐る体験を通して、森林整備の大変さや林業の技術を実感したという声です。

- ・実際に木を切り倒す体験をして、森林整備の大変さを学ぶことができました。ノコギリを入れたり、木をロープで引っ張ったりする作業を通して、日頃この作業をされている方々への感謝の気持ちが深まりました。
- ・一本の木を伐採するために、これほど多くの労力が必要なのかと驚きました。単純な作業ではなく、難しく大変な仕事だと感じました。
- ・受け口や追い口など、木の倒し方にはきちんとした技術や計算があることを知りました。実際にノコギリを使って体験できたことが良かったです。

また、木を伐ることだけでなく、森林を守るためには継続的な管理が必要であることに気付いた受講生も多く見られました。

- ・ブナ林を守るために、一本一本丁寧にラベリングしたり、定期的に大きさを測ったりするなど、細かな管理を続けていかなければならないことを知りました。
- ・葛城山のブナ林は知識として知っていましたが、実際に森を歩き、ブナの木を直接見たことで、緑の豊かさや保全の様子を詳しく知ることができました。
- ・人の手が加わることによってブナ林が維持されているということを実感しました。

実際に体を動かして作業したことで、達成感や、普段できない体験を楽しんだという声も数多く寄せられています。

- ・みんなで力を合わせて木を引っ張り、木が倒れたときは少し感動しました。
- ・ノコギリのコツを少しつかんで、うまく木くずが出るようになったときは嬉しかったです。
- ・普段の生活では体験できない太い木を切ることができ、とても良い経験になりました。
- ・自分で切った木を使ってコースターを作り、持ち帰ることができたのも良かったです。

さらに、ブナ林の散策や植物観察などを通じて、和泉葛城山の自然そのものに興味を持った受講生もいました。

- ・ブナ林を歩いて回れたことや、近くの林とは違う植生の森を散策しながら話を聞いたことが良かったです。
- ・午前中のエリア探索で、植物の見分け方について詳しく話を聞いたことが印象に残りました。
- ・ブナについてさまざまなことを知ることができ、木の切り方など、知らなかったことをたくさん学べました。

一方で、改善点としては「伐倒した木が実際に倒れるところまで見たかった」という意見が複数寄せられました。安全管理や時間の制約もありますが、受講生にとって木が倒れる瞬間は今回の体験の中でも特に印象に残る場面であったことがうかがえます。また、アブが多かったことから、ハチだけでなくアブについても事前に対策を案内してほしいという意見もありました。

このように、実際に木を伐るという体験を通して、森林整備の大変さや林業の技術を身をもって学んだこと、ブナ林が人の手による継続的な管理によって守られていることを知ったこと、そして自ら体を動かして作業することで森林保全をより身近に感じることもできたことなど、本講座ならではの学びが受講生の満足度

につながったことがうかがえました。

今回の講座が、森林やブナ林の価値を知るだけでなく、**自然環境を守るために実際に人が関わることの意味を考えるきっかけ**となればと期待しています。受講生が今回の体験を通じて得た「知る」「見る」「体験する」という学びを、今後の環境保全への関心につなげていければと思います。

また、地球温暖化の影響により、標高 800m を超える和泉葛城山でも、積雪する機会が非常に少なくなってきました。雪が積もっても数日で解けてしまうことが多く、こうした気候の変化は、ブナ林やそこに生息する生きものたちの今後にも大きな影響を及ぼすことが懸念されます。だからこそ、今、人類一人ひとりが環境について考え、行動することが重要です。本講座においても、こうした現状を若い世代に伝え、自然環境を守ることの大切さを次世代へつないでいくことが、私たちの使命であると改めて感じています。